

遠い記憶

風花 小町

もう随分昔、私がまだ幼い子供の頃のことだが、ほっとなつかしく思い返す光景がいくつかある。それらはひとつひとつ物語のひとつまのように脳裏に浮かんできて、いつも鮮明である。そのうちのひとつで、三千丈をほうふつさせる白くて長いあごひげを蓄えた、多田のおじいさんとの思い出を書こう。

私が小学校にあがる直前のことだから、昭和 28 年頃、父の仕事の都合で尾道の街の対岸にある向島という島に、空き家となっていた農家を借りて住むことになった。当時家族は両親と私と弟・妹の五人で、中国山地の山村から出て来たばかりの私には瀬戸内の海が珍しかった。潮とか入り江には独特のにおいがあった。みかん・ネーブル・八朔・夏みかんと、いろんな種類の柑橘類が海を見下ろす畑の斜面に黄色の重そうな実をどっさりつけていた。ご近所からたくさんいただければ、うれしくてほおぼって食べたものだ。

この低い山の麓に、農道に沿って農家が点在していた。その中に我が家もあった。多田のおじいさんちは我が家の筋向かいにあり、当時の言葉で "ぶげん者" の家だった。おじいさんはこの家の離れに隠居していた。70 歳過ぎぐらいで、大きなだみ声で話す風格のある老人だった。

当時、うちだけでなく近所の人も、じぶんの家で風呂を沸かさない夜は、この多田さん方でよく "もらい湯" をしていた。

このもらい湯をした後、子供らは決まっておじいさんの居る離れに順次上がり込み、フトンの上に座って満足そうに話をするおじいさんを囲んだ。たいてい 3 ~ 4 人にはなっただろうか。いつも自慢話と決まっていた、まずは瀬戸内で昔活躍した村上水軍の話であった。多田家も先祖の誰かが関係していたらしいとか、誰それがどこどこで戦ったとか...。それともうひとつは、どの戦争かわからないが、そこで自分はいかに勇ましく敵と戦ったとか。その証しに足にはまだ銃弾が残ったままになっていると言って、誇らしげに傷口を見せてくれたりもした。裸電球の下薄暗い中で話がはずんだ。

お兄さんたちは乗せ上手だったし引き時も心得ていて、親たちからクレームはでなかった。夜の遅い時間に、「フーン」とか「すごい!」とか相槌を打ちながら、いっぱしの大人の真似ごとをしているつもりで楽しかったのかもしれない。私などは話がまだ十分理解できない年齢だったけれど、年上のお兄さんたちに交じってその場に居られるだけでよかったし、昼間の外遊びとも雰囲気違っていった。

そうして最後に、おじいさんはだいじそうに缶からあめ玉を取り出して皆にくれるのだ。これもまたうれしかった。

この時のお風呂は鉄製の五右衛門風呂で、薪で沸かしていた。穴の開いた木製の大きな落とし蓋のような物を足の下に沈めて入った。水は井戸から汲み入れた。水道はまだない。だから、自分たちが入った後、水加減、湯加減を気にして、子供といえども次の人のために気配りをして声をかけたものだ。

「湯かげんはどうですか・・・?」と。

この"もらい湯"ひとつでおじいさんの元に集い、おしゃべりや情報交換の場ができ、気遣いすることを覚え、人と接する折りのルールも自然と身に付けていったにちがいない。

これは、卵が病人のお見舞いに持って行かれる程の貴重品であった、戦後をまだ引きずっている頃の話である。我が家には自家用車は勿論、テレビも電話も冷蔵庫も洗濯機もなかった。

我々が今回『海上の道』を取り上げて、柳田国男の世界にひさかたぶりに改めて触れることになってみて、今まで五十代半ばまで、本気で読むことのなかった自分の不勉強ぶりにあきれている。

確かに、「何を言いたいのか筋道をハッキリさせて!」と大きな声をあげたい程のもどかしさを覚えることも多い。しかし、桑原武夫が「数千年来の常民の習慣、俗信、伝説には必ずや深い人間的意味があるはずである。それが記録・攻究されてこなかったのは不当ではないか。柳田の学問的出発点はここにあった・・・」というように、柳田は、あたりまえの事として時の流れに消えていった人間の日常の営みに目を向け、まずは現実をありのまま書き残そうと各地であらゆる物を収集していった。これが、想像も及ばないくらい広い範囲にわたっている。

私が"もらい湯"を通しておじいさんと触れた時の事を書き残しておこうと思っ

たのもこの故である。

柳田国男の作品『山の人生』(大正15年初版、柳田51歳の頃)を読んでいて、今はもうすっかり忘れていたが、子供のころ確かに耳にしたことのあるいくつかの言葉を見つけた。「子取り」「サンカ(山窩)」「歯が生えて生まれた子は鬼子という...」など。

中でも「子取り」(人さらいの意。)という言葉は、こんな所で取り上げられる程の意味を持つ言葉だったのかと驚く程、この言葉との再会は印象的だった。中国地方の山村の出である母は特別強い意識もなくさらっと使っていた。



夜道怪理像図

「子取りが来るから、暗くならないうちに帰ってきなさい。」とか、「子取りは子供をさらって行って、見世物小屋とかサーカスに売るんだよ・・・」とか言って怖がらせました。

私は自分が子育てをする時、バカらしく思えてこの言葉を使った覚えはない。しかし、小学五年生の時サーカスを見に行くと、母の言っていた悲しい話のことを思ったことをおぼえている。

『山の人生』の中には、「夜道怪(ヤドウカイ)」という子取りの名人のごとく考えられているものも出てくる。(私は実際に耳にしたことはない。)

柳田は「これは実はただの人間の少し下品な者で、中世高野聖の名をもって諸国を修行して歩いた法師のことである。(もともとは弘法大師信仰を広めるために全国を歩いた高野山の僧であったが)後に行商が片商売とするものも出て来、何もかも背負うて歩いた。そうして夕方には村の辻に立って、「ヤドウカ」(宿を貸してくれるの意か)と大きな声でわめいた...。『高野聖に宿貸すな、娘取られて恥じかくな』などという諺までもできたのである。」と説明している。

昔は実際に子供が突然いなくなり、そのまま行方知れずになることも多かったのだろう。人間わざとは考えられず、「神隠し」という言葉を使ってみたり、狐や狸のせいにしてみたり、他国から流れ来る怪しげな風体の者のせいにして、悲しみを転嫁したのであろうか。

「サンカ」という言葉もいい語調を持っていなかった。辞書によると「定住せず

山奥や河原に自然人のような生活をしている漂白民のこと。箕作りや椀・杓子製作などを業とし、傍ら狩りや漁をする。」とある。柳田は、「冬になると暖かい海辺の砂浜などに出て来るのから察すると、彼らの夏の住居は山の中らしい・・・」という。里の者からすると、サンカも怪しげな風体の者である。

最後に鬼の子について、柳田は「日本はおろかなる風俗ありて、齒の生えたる子を生みて、鬼の子と謂ひて殺しぬ。」と『徒然慰草(つれづれなぐさみくさ)』巻三(江戸時代初め頃の著述)の例をあげ、これよりはるかに古い書物にも同じような記述があるという。似たような話をあちこちで認めて、次のような思いを述べている。

「けだし人はとうてい凡庸を愛せずにはおられなかった者であろうか。前代の英雄や偉人の生い立ちに関してはいかなる奇瑞でも承認しておりながら、事一たび各自の家の生活に交渉する時は、寸毫も異常を容赦することができなかつた。・・・これ恐らくは天下太平の世の一弱点であつたろう。」と。

世情が落ち着いて人の暮らし向きが豊かになると人間は守りに入り、よそ者や風体の怪しげな者、そして普通とは異なるものを忌み嫌い排除しようとするようになるらしい。

私は初めに、長いあごひげをたゆませてにこやかに笑う元気なおじいさんと子供たちという、いかにもなごやかな凡々たる日常の営みの中の一情景を、遠い思い出の中からたぐり寄せて書いてみた。

そして次に、これも記憶に残っていた「子取り」等の言葉の意味を『山の人生』を頼りに読み解いてみると、あの平穏な生活の根っこには、自分たちの共同社会の生活スタイルを邪魔されることなく守り通していきたいという無意識な人間としての性があったことが見えてきた。

なる程、思いのままに書き連ねてきてみて、最後にこんなにも残酷な事実が浮かびあがってくるとは....。

(2004.2.25 記)

<注> 「夜道怪想像図」の出典について

この図は4～5年前 インターネット上で目にし、すっかり魅了されて私の手元に残しておいたものです。今回、出典を明らかにしようと努めました但し分かりませんでした。ご存じの方がいらっしゃいましたらお知らせ下さればうれしいのですが

....o